

令和元年度東亜大学自己点検・評価報告書に関する外部評価

東亜大学は医療学部医療工学科、医療学部健康栄養学科、人間科学部心理・臨床子ども学科、人間科学部国際交流学科、人間科学部スポーツ健康学科、芸術学部アート・デザイン学科、芸術学部トータルビューティ学科という3学部7学科で構成されている。また大学院総合学術研究科を併設し、通学制・通信制でも多くの学生が学んでいる。

建学の理念を「国際的な場で学際的な研究・教育を実施し、他人のために汗を流し、ひとつの技術を身につけた人材の育成を目的とする総合大学を目指す」としている。

東亜大学学則には目的として「教育基本法に則り学校教育法の定めるところに従って、未来社会の要請に応え得る教育の環境を常に大学内に求め、人間教育並びに高度の専門職業技術教育とその研究とを実施し、もって福祉国家の創造に積極的に参加し、更に世界観に立脚して多民族の繁栄にも寄与し得る、独創的な頭脳・奉仕の精神・健全な身体を兼ね備えた人材の養成をすることを目的とする」を挙げている。さらに長期ビジョン、中期目標、中期計画を掲げ、全学的な取り組みを行っている。

今回の外部評価では上記の建学の理念、目的及び中長期の目標・計画に基づき、令和元年度の東亜大学自己点検・評価報告書について外部評価するものである。

< I. 学部 >

東亜大学の3学部7学科（医療学部<医療工学科、健康栄養学科>、人間科学部<心理臨床・子ども学科、国際交流学科、スポーツ健康学科>、芸術学部<アート・デザイン学科、トータルビューティ学科>）は、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの3つのポリシーに基づき、カリキュラムの工夫により学習効果の高い授業の実現や求められる学生像・人材育成について、令和元年度もそれぞれの学科の特色を活かした形で積極的に取り組んでいる。1年生、3年生、卒業生対象の学修成果アンケートは毎年全学で実施されており、アンケート結果は各学科の学修支援へフィードバックされており、きめ細かい学生支援の参考データとして十分に活用されている。

複数の学科では柱となっている国家試験対策や各種資格の取得も各学科が積極的に取り組んでおり、キャリア支援とリンクさせながら学生の満足度向上に貢献している。国家試験合格率も昨年度より上昇しているようであるが、一部の国家資格では昨年度を下回ったものもあるため、教職員が一丸となつてのさらなる試験対策の充実が求められる。

東亜大学ではこれまでも、社会の教育需要を捉え適切な改革を行ってきた。今回の自己点検・評価報告書の記述を見ても、学生の立場に寄り添い、きめ細かに効果的な教育改革を実践してきたことが十分に理解できる。今年度以降も引き続き、優れた人材育成に努め、建学の理念に基づいた「国際的な場で学際的な研究・教育を実施し、他人のために汗を流し、

ひとつの技術を身につけた人材の育成」ができる総合大学として、地域・社会に貢献できるような教育機関となっていくことが期待される。

<Ⅱ. 大学院>

大学院総合学術研究科は医療科学専攻、人間科学専攻、デザイン専攻、臨床心理学専攻を有し、通信制は法学専攻、人間科学専攻、デザイン専攻を有している。

中期目標に①大学院の教育の体系化、②人材育成、③生涯学習、④教育改革、⑤実学教育、⑥学生サポートを掲げ、シラバス公開、授業評価アンケートを実施し、教育内容の見直しを行っている。

通信制の法学専攻においては入学試験の競争率が4倍近くとなっており、スクーリング等での論理的な文章の作成指導、修了生の修士論文は高い評価を受けているという。また一昨年に修了生の卒後研修を目的として創立された「東亜大学租税法研究フォーラム」は学外にも研修を働きかけている。今後の大学院のさらなる充実・発展に期待したい。

<Ⅲ. 全学委員会・組織>

全学の中期目標は、教学においては①入学から卒業までの学習システムの体系化を推進し学力の強化を図る。②地球市民としての人材育成を行う。③生涯学習に貢献する。④教育改革を推進する。⑤実学教育を推進する。⑥学生サポートの充実を図る。の6点を掲げている。教職員に対しては「すべては学生のために」を、対外的にはGHL「グローバル」「ヒューマニティ」「ライセンス」をスローガンにしている。令和元年度は「既成概念をはみ出して考え、自己の限界を超えて社会に変革を起こすべく、いま行動を起こすこと」「人間生活をより豊かにするための新しい繋がりのあるあり方を私たち自身がかかわるあらゆるステージを模索し確立していくこと」「謙虚に素直に相手をおもんばかり、奉仕の精神を持って、何事にも対処し、誰かのために生きるということを考えること」を掲げている。

全学委員会及び各組織がこの中期目標の達成に向かって、令和元年度は教職員一丸となって努力してきたことが、自己点検・評価報告書より読み取れる。教学においてはカリキュラムの見直しをはじめ、中期目標に基づく「グローバル人材の育成」の検討・実施している。広報においては学生募集戦略を柱に、教職員が協力して大学ブランド・イメージの向上に努めている。学生支援については学生電子カルテを全学的に実施し、申し送り事項の共有化、出欠の早期確認等により指導が必要な学生を早期発見し対応することで退学者・休学者の減少を図っている。このような取り組みが学生の満足度を向上させ、大学全体の発展へと繋がるものと確信している。

<東亜大学への提言>

現在、日本の大学を取り巻く環境は厳しいものがあるといえよう。少子化、高齢化、経済の先行きの不安、大学間の競争の激化等々、挙げればマイナス要因は数多くあり、令和元年度末よりは新型コロナウイルスの影響で新たな対応が迫られている。そのような厳しい状況において、東亜大学はこれからも社会と地域に必要な大学であり続けなければならない。

「生涯学習」の必要性は様々な場面で語られているが、日本ではまだまだ定着していないのが現状であろう。東亜大学でも社会人入試制度や大学院での通信制設置等、他大学と比較しても生涯学習に積極的に取り組んでいる姿勢は高く評価できる。

しかし、急激な高齢化という環境の中で急増している高齢者や定年を迎えた方々の学びの場はまだ東亜大学にはないように思われる。通常の社会人枠を越えて、幅広く生涯学習の機会を提供していくのも大学の使命と考えられる。

残念ながらこの下関及び北九州エリアでは生涯学習に十分に対応できている大学がほとんどないのが現状である。東亜大学は総合大学として、医療系、人間科学系、芸術系、健康系、美容系等々、高齢者の興味がある分野が幅広くあり、専門の教員も充実している。そこで生涯学習を希望する方々、特に高齢者や定年を迎えた方々をターゲットとして絞り込んだ学習コースを設置し、その方々の学びのニーズに応えることが地域の貢献・大学の発展に繋がるのではないかと考えられる。また、キャンパス内に経験豊かな高齢者が入ることで、在学生の刺激ともなるのではないかとと思われる。

この提言は施設の完備や必要な人員の配置、行政との調整等、準備の時間がかかるとは思われるが、東亜大学がこれからも地域と社会に必要な大学であり続けるためにはぜひとも検討していただきたいと思っている。

令和2年10月30日

東亜大学自己点検・評価外部委員

富永 洋一